

# 日本人小児における顎関節症の自覚症状と生活習慣・性格傾向との関連性 Factors affecting symptoms of temporomandibular disorders in Japanese children

○岡本亜祐子, 荻部洋行, 河上智美, 島津貴咲  
Ayuko Okamoto, Hiroyuki Karibe, Tomomi Kawakami, Kisaki Shimazu

(日歯大・生歯・小児歯)

Nippon Dental Univ., School of Life Dent., Dept. Pediatric Dent.

## 【目的】

顎関節症の症状は、10代前半から経年的に増加し<sup>1)</sup>、様々な因子(解剖学的因子、病態生理学的因子、心理社会的因子など)が関与して発症・継続することが知られている。そこで、若年期の顎関節症に関与する因子を検索し、その因子に対して予防的配慮を行えば、顎関節症発症と重症化を未然に防止できると考えられる。

本研究の目的は、日本人小児を対象として、顎関節症を含む顎顔面部の痛みの自覚症状と生活習慣・性格傾向との関連性を検討し、症状に関与する因子を抽出することにより、若年期の顎関節症への効果的な予防プロトコルを確立することである。

## 【対象と方法】

東京都内と静岡県内の小学5・6年の小児923名(女児483名、男児440名、平均年齢11.6歳)を対象とした。自覚症状と生活習慣の評価には、自己記入式質問票を用いて、顎関節症(疼痛、顎関節音、開口障害)の自覚症状3項目、顎顔面部の痛み(頭痛、肩こり、歯痛)の自覚症状3項目、生活習慣における頻度(嗜好食品、姿勢、習癖、睡眠姿勢、課外活動など)14項目を評価した。性格傾向の評価には、自己記入式の状態-特性不安検査 State Trait Anxiety Inventory for Children-Trait (STAIC-T)を用いて、特性不安を評価した。

顎関節症の自覚症状のある群(TMD群)と自覚症状のない群(CON群)に分類し、2群間における各評価項目の比較を行った。さらに、多重ロジスティック回帰分析を用いて、顎関節症の自覚症状の有無に対して、年齢、性別、特性不安、顎顔面部の痛みの有無、および生活習慣の頻度が影響するかを検討した。

本研究は、日本歯科大学生命歯学部倫理審査委員会の承認(NDU-T2012-21)を得て行われた。

## 【結果】

顎関節症の自覚症状が認められたのは923名中66名(7.2%)であった。TMD群(女児33名、男児33名、平均年齢11.6歳)とCON群(女児450名、男児407名、平均年齢11.5歳)との間で年齢、男女比に有意差は認められなかった。STAIC-Tスコアは、TMD群で有意に高い値を示した( $P<0.001$ ,  $t$ -test)。TMD群は、CON群と比べて、頭痛、肩こり、歯痛の自覚症状が有意に多く認められた(すべて $P<0.001$ ,  $\chi^2$  test)。生活習慣の評価項目では、日中の食いしばり、頬づえ、硬い枕の使用、チューインガムの摂取がTMD群で有意に多く認められた( $P<0.001$ ,  $P=0.001$ ,  $P=0.017$ ,  $P=0.048$ ,  $\chi^2$  test)。

多重ロジスティック回帰分析の結果、顎関節症の自覚症状に影響する変数として、STAIC-Tスコア、頭痛の有無、日中の食いしばりの頻度が選択された。STAIC-Tのオッズ比は1.06(95%信頼区間1.02-1.10)、頭痛は2.91(95%信頼区間1.66-5.10)、日中食いしばりは5.42(95%信頼区間1.03-28.46)であった。

## 【考察】

本研究結果から、すでに10代前半において、顎関節症の症状と不安になりやすい性格傾向には関連があり、随伴症状としての頭痛や日中の食いしばりとも関連することが明らかとなった。従来、小児には顎関節円板障害の発症頻度が高いといわれているが、本研究では、顎関節症の自覚症状と筋障害に関与する因子との関連が認められた。よって、若年期の顎関節症予防には、日常生活での注意事項として、ストレスの緩和、正しい姿勢の維持、睡眠時の筋肉への負担軽減、食品摂取の指導、を取り入れるとともに、日中の食いしばりに対する行動変容が有効となることが示唆された。

## 【文献】

- 1) Karibe H, et al., Cranio, 30(2): 114-120, 2012.